特別展覧会　妙心寺

あの寺に、こんなにお宝があった！ 渋さと豪華、ふたつの禅アートに出会う。

ART 開催中

重要文化財　龍虎図屏風（部分）狩野山楽筆（桃山時代）妙心寺蔵　※4月21日から展示

シンプルで何もないことが禅の美学。それも間違いではありませんが、といって寺に何もないのかと短絡してはいかん。

禅寺では信仰の一環として、墨跡と呼ばれる高僧の書、禅問答を表現した書画といった禅アートが生み出されてきた。そして禅に帰依した権力者が宝物を寄付し、禅寺を最新のアートで飾ったワケだから、何もないどころか、禅寺は一種のギャラリーのようだった。国宝「瓢鮎図」を描いた如拙のように画家として活躍した禅僧も多い。

妙心寺は1337年、花園法皇が離宮、つまり別荘を改めて禅寺にしたもので枯山水や苔庭の塔頭は戦国大名ゆかりのものも多い。かなりのゴージャス空間だ。

開山以来650年のあいだ生み出されてきた禅アート、寺の名宝の数々を特別公開。おなじみの妙心寺がまぶしい。

（沢田眉香子）

■「特別展覧会　妙心寺」■ 京都国立博物館■ ～5.10（sun）■ 問い合わせ　☎075・525・2473（テレホンサービス）／月休（5月4日は開館）■ 一般1300円

萌春の美 －重要文化財　豊公吉野花見図屏風とともに－

ART 開催中

日本史一、花見が似合う男・秀吉の、一大イベント・吉野の花見図屏風。

重要文化財「豊公吉野花見図屏風」（左隻）（1594）

お花見シーズン真っ盛り（たぶん）！ 公開中の「豊公吉野花見図屏風」が面白い。描かれたのは桃山時代。庶民が現在のような阿鼻叫喚・花見絵図をくり広げ始めたのは江戸時代。当時、花見イベントは最先端のお楽しみだったはず。イベント主催は秀吉。「ラグジュアリーに装うべし」とでも号令がかかったのか、同行した大名たちは皆ギンギンの出で立ちで、伊達政宗なんか南蛮人のコスチュームでキメてたり。そんなこんなの道中を覆うのが、霞のような満開の花。場の浮かれた熱気が肌で伝わってくる。

ご一行がまさに到着したのは吉野の金峯山。京都から電車とバスを乗り継いでもかなり遠い。桜と聞けばそんな場所まで勇んで出かけて春を謳歌した秀吉と、「花見なんてウザくって。描かれた花を眺めてる方がラク」と思う自分。きっとこの差が天下を分けた。

（沢田眉香子）

■「萌春の美―重要文化財　豊公吉野花見図屏風とともに―」■ 細見美術館■ ～4.19（sun）■ 問い合わせ☎075・752・5555／月休■ 一般1000円

Kyoto Car-Moratorium

～京都人のクルマ知らず～

FINAL Lap

「世界的不況がクルマをさらにワクワクさせる」

このコラムがスタートした2年半前と今、自動車業界を取り巻く環境は別世界のように激変した。「米国自動車ビッグ3の経営危機」「ホンダのF1撤退」など、夢にも思わなかったことが次々と現実となっている。

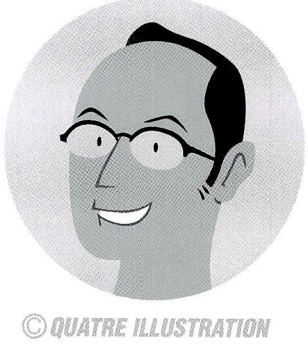
明るい兆しは、ホンダのハイブリッドカー「インサイト」が車両本体189万円という低価格が受けてか、当初予想の3倍の受注を受けているということ。低価格はバッテリーとモーターの性能が上がったことが大きな要因だろうが、10数年前、肩から弁当箱を吊り下げたような携帯電話から、今では厚みが1センチ程度の超薄型まで現れ、わずか数年で格段に進化するのを目の当たりにした小生は、異業種が技術革新を持ち込んで自動車市場に参入して欲しいと思っている。

勝手な想像だが、将来はNINTENDOが「Wii-car」なるエンターテインメント性に特化した電気自動車を、はたまたAppleがデザインと通信機能に特化した電気自動車「i-car」なんてのを販売するかもしれない。そう考えるだけでワクワクしてくるし、異業種の参入は「若者の自動車離れ」を一気に解消し、自動車業界に大きなパラダイムシフトをもたらすだろう。数十年後「100年に1回の不況がクルマにかつてない革命をもたらした」となればこの不況も悪くはない。

2年半「車道家元」として様々な切り口でクルマを語ってきたが、最も言いたかったことは、「ほんの少しの、自分だけの工夫で、別世界のカーライフがすぐそこにある」ということだ。これからもクルマが人を、そして京都をワクワクさせる存在であることを願い筆を置きたい。ご愛読、ありがとうございました。

中島 崇（なかじま・たかし）

'68年生。自称「クルマのソムリエ」。創業昭和38年、北区は紫野の自動車屋・(株)中島商会の二代目社長にして「安くていい車」を探すスペシャリスト。かつて自動車オークションの取引で2000万円をドブに捨て、大失敗の連続から学んだノウハウをまとめた無料小冊子「その車に手を出すな！」も好評。中島流「車道家元」を目指す京都人。



© QUATRE ILLUSTRATION